The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジョアン・ロドリゲス『日本小文典』に見られるCanadzucaiという用語について
Author(s)	岸本, 恵実
Citation	大阪外国語大学論集. 2002, 26, p. 97-109
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79877
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学論集第26号（2002年）

ジョアン・ロドリゲス『日本小文典』に見られる Canadzucai という用語について

岸　本　恵　実

The term *Canadzucai* described by João Rodriguez in *"Arte Breve da Lingoa Iapoa"*

KISHIMOTO Emi

João Rodriguez S. J. (1561?-1633?) is famous as the author of two Japanese grammar books. One is *"Arte da Lingoa de Iapam"* (so-called *"Arte Grande"*) published in 1604-1608 and the other the rearranged and revised *"Arte Breve da Lingoa Iapoa"* (*"Arte Breve"*) edited in 1620. It is already known that *"Arte Breve"* is not only the summary of *"Arte Grande"*, and one of the points newly introduced in *"Arte Breve"* is the term *Canadzucai*, which can be seen in a few places.

Rodriguez uses *Canadzucai* for eight times in *"Arte Breve"*. The most extensive description of the term can be seen in the pages 8v. - 9r, where it is said as follows : In order to master the conjugation of Japanese verbs, it is very important to know about *Goyn* and *Canadzucai*. This *Canadzucai* means how to write in *Kana*, how to compound syllables and letters for making words, and how to write each tense and mood in *Kana*. Other examples of *Canadzucai* coincide with this explanation, and most examples are seen in relation with verb conjugation.

In the world of Japanese *Tanka* and *Renga* poetry of the epoch, *Canadzucai* usually meant how to use the correct *Kana* in some cases when there are several choices of *Kana* for one syllable. However, in that epoch there can be discovered some books with concern to the rules of writing *Kana* (*Kanazukai-sho*), which contain charts of the Japanese syllabary (*Gojūon-zu*) and explain about verb conjugation as one of the fundamental rules of distinction. We can come to the conclusion that Rodriguez thought useful that foreign learners of Japanese had knowledge of *Goyn* and *Canadzucai* in order to master the conjugation of Japanese, and introduced the idea in his *"Arte Breve"*.

1．はじめに

イエズス会士ジョアン・ロドリゲス（João Rodriguez 1561?-1633?）は、『日本大文典』（*"Arte da Lingoa de Iapam"* 1604-1608年刊、以下「大文典」と呼ぶ）と、後年まとめ直された『日本小文典』（*"Arte Breve da Lingoa Iapoa"* 1620年刊、以下「小文典」と呼ぶ）[1] という二つの日

本語文法書を著した。小文典は、単に大文典を簡略化したものではないことが既に知られているが、小文典では、大文典や、『日葡辞書』(1603年本編・1604年補遺刊) などのほかのキリシタン語学書類に見られない Canadzucai (仮名遣) という用語が用いられていることも、その特徴のひとつである。本稿では、小文典において、Canadzucai という用語の概念がどのように捉えられているかについて考察を試みる。

2. 小文典における Canadzucai の用例

2.1. Goyn と Canadzucai についての説明

Canadzucai という語は小文典のなかで8例あり、18v, 19r (3例), 21v, 24v, 32r, 71r に見られるが、全部で8例のうち1例 (71r) を除く7例までが、動詞の活用形を説明する中で用いられている。以下引用文中、二重下線及び本文に出てくる順に<1>～<8>の通し番号で示すことにする。18v : <1>, 19r : <2><3><4>, 21v : <5>, 24v : <6>, 32r : <7>, 71r : <8>である。

18v から19r にかけて、ロドリゲスは Goyn (五音/五韻) と Canadzucai の用語を用いて、動詞[2] の活用形の導出法について一般的な心得を述べている。まずはこの箇所から、ロドリゲスが考えていた Goyn 及び Canadzucai の理論の大筋を把握したい。

2.1.1. 18v の記述

Canadzucai について最も説明の詳しい18v では、動詞の活用形を導き出すためには Goyn と Canadzucai の知識をもつことが重要であると主張されている。

No q̃ toca em geral à formaçam dos tempos, & modos dos verbos, aduirta se q̃ pera hũ saber de raiz a verdadeira, & natural formaçam de todos os tempos, & modos, q̃ tem proprias vozes nesta lingoa, assi affirmatiuas, como negatiuas, importa grandemente ter noticia do vso do seu, *Goyn*, que sam as suas cinco letras vogaes, com as syllabas, que estam de baixo de cada hũa dellas, de que a tras fallamos, & saber juntamente seu, *Canadzucai* <1>, q̃ he o modo de escreuer cõ a letra, *Firagana*, & o modo como se ajuntaõ hũas syllabas, ou letras com outras, pera formar as palauras, vendo que syllaba se muda hũa em outra, ou constitue longo, ou breue, ou ditongo, ou he sincopa de outra, ou faz incremento no verbo, & qual liquescit, ou nam, & o como na mesma, *Cana*, se escreuem os tempos dos modos. (18v)

(つぎに、動詞の時制と法を示す活用語形の導きかた一般について心得ておくべきことを述べる。日本語の動詞には、肯定活用・否定活用を問わず、いずれの時制・法にあっても [時制と法を表わす] 特定の語形があるが、その語形を正しくかつ無理なく導く方法を確実に身につけるには、つぎの三点を知っておくことがきわめて重要である。すなわち、すでに述べた Goyn (五韻) つまり五つの母音字とそれぞれの母音字の下にある音節 [字] の使いかたと、あわせて Firagana (平仮名) の文字で書く方法、つまり Canadzucai (仮名遣) を知っていること、音節つまり文字を合して [あたらしい] 語 [活用語形] を導く方法を知っていること－あたらしい語を導くにあたっては、どの音節がべつのどのよ

うな音節に換わるか、どの音節が長音または短音または二重母音となるか、どの音節がいずれの音節の短縮形か、どの音節が動詞に加わってその動詞を拡大するか、どの音節が半母音化するかあるいはしないか、をまず見きわめなければならない－、それぞれの法の各時制形を Cana (仮名) でどのように書くかを知っていること、以上の三点である。(訳書：(上) 100))

この箇所によると、「動詞の活用形を正しくかつ自然に導く方法を確実に身につける」ためには、

1 Goyn の使いかたを知る

2 Canadzucai を知る

ことがきわめて重要であるという。そしてこの Canadzucai とは、

①平仮名で書く方法

②語を形成するために音節あるいは文字が他の音節あるいは文字とどのように合わさるか（その際、どの音節が、他の音節に換わるか、長音、短音、二重母音を構成するか、他の音節の短縮形か、動詞の中で増加するか、半母音化するかしないか、が見られる）というその方法

③平仮名でそれぞれの法の時制がどのように書かれるかという方法

の三つの事柄を指すようである。この①②③を基に、殊に②③に注目しながら、ロドリゲスのいう Canadzucai の内容について後の<2>～<8>の７例からさらに検討していきたい。

2.1.2. Goyn について

用語 Canadzucai の他の用例を見る前に、18v の記述から、明らかにこの語と密接な関わりをもつと考えられる Goyn の表す内容について見ておかなければなるまい。Canadzucai は、実に８例中６例 (18v, 19r (３例), 24v, 32r) までが Goyn という用語と合わせて使われている。

先に挙げた18v では、Goyn とは「五つの母音字とそれぞれの母音字の下にある音節」であると定義されていた。ここより前の箇所（7v）に、いろは四十七文字の表に続き、18v より詳しい Goyn の説明が見られる。

Estas mesmas syllabas ordenão elles pollas suas cinco vogaes pondo de baixo de cada vogal, as terminadas nella. As suas cinco vogaes, chamadas *Goyn*, idest, as cinco vozes por sua ordẽ, sam, *A, I, V, Ye, Vo.* As syllabas sam as seguintes, & se lem em sua letra de cima pera baixo, & ao traues começãdo da mão direita pera a esquerda; fazẽ o numero de cincoenta, por se repetirẽ algũas dellas duas vezes, pondo dez de baixo de cada cabeça. (7v)

（日本人はおなじ四十七音節 [字] を並べるのに、五つの母音を基準にして、それぞれの母音 [字] の下にその母音で終る音節 [を表わす文字] を置く並べかたもする。五つの母音は Goyn（五韻）―五つの音（おん）の意―と言い、日本人の並べかたの順序で言えば、A（あ）、I（い）、V（う）、Ye（ゑ）、Vo（を）である。四十七音節はつぎのとおりである。読む時は上から下へ、横へは右から始めて左へ進む。数は五十になるが、これは一部の音節を二度用いて最上段のそれぞれの音節の下に九つの音節を置いているためである。(訳書:(上)50)）

これに続いて、以下のような五十音図が掲げられている（原本ではローマ字は横向きであるが、便宜上縦向きに改めた）。

を Vo	ゑ Ye	う V	い Y	あ A	
こ Co	け Ke	く Cu	き Ki	か Ca	
そ So	せ Xe	す Su	し Xi	さ Sa	
と To	て Te	つ Tçu	ち Chi	た Ta	
の No	ね Ne	ぬ Nu	に Ni	な Na	
ほ Fo	へ Fe	ふ Fu	ひ Fi	は Fa	
も Mo	め Me	む Mu	み Mi	ま Ma	
よ Yo	え Ye	ゆ Yu	ゐ Y	や Ya	
ろ Ro	れ Re	る Ru	り Ri	ら Ra	
お Vo.	ゑ Ye.	う V.	い Y.	わ Va.	(7v)

なお、大文典においても、Goyn という語は用いられている。この用語について小文典ほどの詳しい説明はないものの、やはり五十音図の意味で用いられている (56r, 176r)。したがって、ロドリゲスのいう Goyn とは、五つの母音を基にした、五十音図の知識のことだと考えられる。

小文典の18v では、先に挙げた Goyn と Canadzucai の重要性を説いた箇所のあと、Goyn に関する説明が続いている。

O *Goyn*, nam sòmente mostra as syllabas, ou letras da, *Cana*, que se alteram hũas em outras, como sam, *Fa, Fe, Fi, Fo, Fu.* que se mudam em suas chegadas. *Ba, Be, Bi, Bo, Bu.* & em *Pa, Pe, Pi, Po, Pu.* mas tambem mostra outra sorte de mudança de hũas em outras, que ha entre as da mesma ordem; como he entre, *Fa, Fe, Fi, Fo, Fu. Ba, Be, Bi, Bo, Bu. Ma, Me, Mi, Mo, Mu,* &c. mũdãdo se muitas vezes por regra que ha, *Ma*, em *Mi*, ou ao controrio (sic), *Bu*, em *Ba*, & *Bi*, em *Ba*, & ao contrario, & assi nas de mais ; & a maior parte da formaçaõ dos tempos dos modos esta encerrada nesta mudança, o q̃ se ve claramente no modo de escreuer as vozes dos tempos com a letra, *Cana*. E a isto mesmo pertence outra mudança, que ha entre as syllabas, que tem entre si certo cunhadio, & affinidade, como sam, *Ma, Fa, Ba, Pa. Me, Fe, Be, Pe. Mi, Fi, Bi, Pi. Mo, Fo, Bo, Po. Mu, Fu, Bu, Pu.* & *Mu*, & *V*. Donde pera escener (sic) na, *Cana*, *Vma*, escreuẽ, *Muma*, & *Mume*, por *Vme*, por responder assi melhor à pronunciaçam, & *Mu*, por *Bu* ; (18v)

(Goyn は、例えば Fa, Fe, Fi, Fo, Fu がそれぞれ類似の Ba, Be, Bi, Bo, Bu ; Pa, Pe, Pi, Po, Pu に換わるように、どの音節つまりどの Cana の文字がべつのどれに換わるかを教えてくれるだけでなく、もう一種の交替、すなわち同一の段のなかの音節 [字] のうちどれがどれと換わるかも教えてくれる。同一の段とは例えば Fa, Fe, Fi, Fo, Fu; Ba, Be, Bi, Bo, Bu ; Ma, Me, Mi, Mo, Mu などのことで、Ma が Mi に、あるいはその逆に、Bu が Ba に、Bi が Ba に、あるいはその逆に、規則的に換わることがしばしば見られるのであって、こうしたことは他の段にあっても同様である。しかもそれぞれの法の各時制を示す [活用] 語形の導きかたの大半がこの交替と密接につながっており、このことは Cana

の文字で各時制形を表す表記に明確に表れている。これと同種の交替としてたがいに類縁・類似関係にある音節、例えばMa, Fa, Ba, Pa；Me, Fe, Be, Pe；Mi, Fi, Bi, Pi；Mo, Fo, Bo, Po；Mu, Fu, Bu, PuまたはMuとVのあいだに生じる交替もある。Vma (馬) をCanaで書くとMuma (むま) となり、Vme (梅) がMume (むめ) となるのもこの例で、このほうが発音によく対応しているのである。Bu (ぶ) をMu (む) と書くのも同様である。(訳書：(上) 101))

ここでは、Goynの理論により以下のア）イ）ウ）の交替が説明されるということが示されている。

ア）ハ行がバ行・パ行に換わるような、清濁に関する交替

イ）Ma, Me, Mi, Mo, Muの間で生じるような、同じ行の中で規則的に起こる交替（いわゆる「五音相通」）

ウ）Ma, Fa, Ba, Paの間で生じるような、同じ列の中で起こる交替（いわゆる「同韻相通」）

ア）の清濁の交替は五十音図から直接理解される事柄ではないが、8r, 9rに説明のある、Sumi（清み）の音節の仮名に点を付けて類似したNigori（濁り）の音節に換える方法が、行ごとに規則的に行われることから、Goynの理論に含められたと考えられる。

そして、この18vによると、イ）の同行内の交替は活用形の導き方の大半と密接につながっており、このことは仮名で各時制を表す表記、すなわち先に述べた、平仮名でそれぞれの法の時制がどのように書かれるかという方法の意味でのCanadzucai（③）に明確に表れているという。

上の記述から、ロドリゲスが考えていたGoynとCanadzucaiの関係を窺い知ることができる。つまり、Goynすなわち五十音図の理論に基づいて、実際に仮名で表記する用法がCanadzucaiであり、GoynとCanadzucaiは理論と実用の関係にあると考えられよう。

さらに18vの続く箇所で、ロドリゲスは

de modo que toda a armonia das formaçoens de sua lingoa consiste no *Goyn*, & *Canadzucai* <2>, (18v -19r)

（日本語の活用語形を無理なく自然に導くことができるかどうかは、あげてGoynとCanadzucaiによってきまることになる。（訳書：(上) 101-102)

と述べ、仮名の学習者を導く教師に対して

hum liurinho que ensina o *Canadzucai* <3>, & regras geraes desta materia (19r)

(Canadzucaiとその一般則を説明した小冊子（訳書：(上) 102))

による指導を勧めている。

2.2. Canadzucaiの具体例の検討

当節では前節2.1.で見てきた、ロドリゲスのいうCanadzucaiの概念及びGoynとCanadzucaiとの関係を、さらにCanadzucaiの例<4>～<8>から確かめていきたい。

2.2.1. Goyn と Canadzucai に基づく活用形導出法

19r の先の箇所に続く部分で、ロドリゲスは次のように述べている。

Por falta deste conhecimento do, *Goyn*, & *Canadzucai* <4>, algũas das regras, que ategora correram a cerraca das formaçoens dos verbos (das quaes deixamos algũas assi como estauaõ) nam sam as verdadeiras, & naturaes conforme ás regras de seu, *Goyn*, mas imaginadas, formando alguns tempos, & modos affirmatiuos da voz negatiua, & outros de outras remotas, por parecer que respondiam á formaçam, & nam se saber a propria, sendo ao contrario, que assi o affirmatiuo, como o negatiuo, se formam do affirmatiuo, começando da raiz, como a baixo se vera. (19r)

(動詞の活用語形の導きかたに関してこれまで行われてきた規則のなかには、Goyn と Canadzucai に関するこうした知識を欠いていたため、Goyn の規則から見ると無理のない正しい規則などではなく想像の産物にすぎないものがあり、時制・法を示す一部の肯定語形を否定語形から導いたり、ある語形をそれとは非常に関係のうすい語形からつくったりしている。これはそうするのが [正しい] 活用語形の導きかたであると思い、真の導きかたを知らなかったためであるが、事実はこれと逆で、肯定語形も否定語形も、以下に見るように、語根を出発点として肯定語形から導くのである。(訳書 : (上) 102))

すなわち、肯定形も否定形も、語根（現代語でいう連用形）をもとに肯定形から導くのが正しい方法であり、そのためには Goyn と Canadzucai の知識が必要である、というのである。

これに続いて、具体的な活用形の導出法が示される。この中で実際に、24v と32r では、活用形を導くために Goyn と Canadzucai に即していると称する方法が用いられている。この記述をまとめると、次のA）B）の方法である。

A）第二活用動詞 (ハ行以外の四段活用動詞とナ行変格活用動詞) の否定形を導く方法で、肯定動詞の語根の I を Anu か Azu に換える (24v, 32r)。例、Yomi, yomanu, yomazu.

O negatiuo presente se pode formar de dous modos : o primeiro, & proprio do seu, *Goyn*, & *Canadzucai* <6>, se forma mudão o *I*, da raiz, em *Anu*, ou *Azu*. (24v)

([直説法の] 現在時制否定形を導くには二つの方法がある。第一の、そして Goyn（五韻）と Canadzucai（仮名遣）に固有の方法は、語根の I を Anu か Azu に換える。（訳書:(上) 124))

B）第三活用動詞 (ハ行四段活用動詞) の否定形を導く方法で、肯定動詞の語根の I を Vanu か Vazu に換える (32r)。例、Narai, narauanu, narauazu.

Os da segunda, & terceira conjugaçam se podem formar de dous modos ; o primeiro, proprio de seu, *Goyn*, & *Canadzucai* <7>, se forma da raiz mudando os da segunda o, *I*, em, *Anu*, ou *Azu*.... Os da terceira mudaõ o *I*, em, *Vanu*, ou *Vazu*. (32r)

(第二・第三活用型動詞には、導きかたがそれぞれ二つある。一つは Goyn（五韻）と Canadzucai（仮名遣）に固有のもので、第二活用型動詞では [肯定動詞の] 語根の I を Anu か Azu に換えて導く。…第三活用型動詞では、[肯定動詞の語根の] I を Vanu か Vazu に換える。（訳書 : (上) 161-162))

これらの第二活用・第三活用の否定形の作り方については、A）B）の語根からの導出法

のほか、以下のａ）ｂ）の方法も紹介されている。

ａ）第二活用動詞（ハ行以外の四段活用動詞とナ行変格活用動詞）の否定形を導く方法で、直説法未来の ŏ を Anu か Azu に換える。例、Yomŏ, yomanu, yomazu.

ｂ）第三活用動詞（ハ行四段活用動詞）の否定形を導く方法で、直説法未来の ŏ を Anu か Azu に換える。例、Narauŏ, narauanu, narauazu.

Ａ）Ｂ）とａ）ｂ）の導出法を、動詞「立つ」（タ行四段活用）・「歌ふ」（ハ行四段活用）の二例を挙げて比較すると以下のようである。

Ａ）Tachi, tatanu, tatazu.	たち、	たたぬ、	たたず
ａ）Tatŏ, tatanu, tatazu.	たたう、	たたぬ、	たたず
Ｂ）Vtai, utauanu, utauazu.	うたひ、	うたはぬ、	うたはず
ｂ）Vtauŏ, utauanu, utauazu.	うたはう、	うたはぬ、	うたはず

すでに豊島（1989）の指摘がある通り、ローマ字綴りの面から見ると、ａ）ｂ）の方法はＡ）Ｂ）よりも綴り字の変化が小さい。特にサ・ザ・タ・ダ行については、ａ）をＡ）と比べるとわかる通り変化が小さくて済む。

一方、仮名表記として見ると、Goyn と Canadzucai に固有な方法であるというＡ）Ｂ）のうち、Ａ）では語根（連用形）の「ち」が「た」に、Ｂ）では「ひ」が「は」に換わる。Ａ）はタ行間、Ｂ）はハ行間の交替であり、18v で見られた Goyn の説明中、同行内での交替、言い換えれば「五音相通」の理論に当てはまるものである。ロドリゲスは、ａ）ｂ）のような綴りの変化が小さく、外国人にとっては比較的易しいと思われる導出法よりも、日本固有の五十音図に基づいた、語根から導くＡ）Ｂ）の方を第一の方法として優先して挙げているのである。

2.2.2. Canadzucai 単独使用の用例

これまでのところで、Goyn とともに用いられている Canadzucai の６つの用例を検討した。本項では、Canadzucai が単独で用いられている残る<5>, <8>の２例を検討する。２例が現れるそれぞれの箇所では、下のようなことが Canadzucai に基づいていると述べている。まず21v には以下のようにある。

> O segundo conjunctiuo seu presente se forma, mudando o derradeiro, *Ru*, do indicatiuo presente em, *Redomo*. Vt, *Motomuredomo* ; pera preterito, acrecentam ao preterito perfeito do indicatiuo, *Redomo*. Vt, *Motometaredomo*, o qual modo em rigor he, *Motomete aredomo*, perdendo o, *E*, do participio, como tambem, *Motometa* ; & outras vozes terminadas em , *Ta*, de preterito, sam, *Motomete aru*, o qual sincopado faz, *Motometaru*, & este na pratica sincopado outra vez faz, *Motometa* ; o que tudo se ve em seu, *Canadzucai* <5> ; (21v)
>
> （第二種の接続法。この法の現在時制形は直説法現在時制形の最後の Ru を Redomo に換えて導く。例、Motomuredomo（求むれども）。過去時制形は直説法完了過去時制形に Redomo を加える。例、Motometaredomo（求めたれども）。この語形は、厳密に言えば Motomete aredomo（求めてあれども）で、このなかの分詞 [Motomete] の E を落とした

ものが Motometaredomo である。同様に、[直説法] 過去時制の Motometa も [厳密には] Motomete aru で、これが短縮形としての Motometaru となり、これが会話体で再度短縮化して Motometa となったもので、このことは Ta で終る他の過去時制形にも妥当する。こうしたことはすべてCanadzucai(仮名遣)を見ればわかることである。(訳書:(上)110-111))

ここでの Canadzucai は、第二種接続法の活用形導出全体を指していると考えられるので、Goyn の理論を基にした、平仮名でそれぞれの法の時制を書く方法（③）の意味であろう。またこの箇所で説明されている、

Motomete aredomo → Motometaredomo

Motomete aru → Motometaru → Motometa

という新しい語形が作られる際に起こる音節の短縮化現象は、語を形成するために音節が他の音節と合わさる方法（②）であり、この箇所の Canadzucai は②③両方の意味を含んでいるといえる。

またもう一つの例は、動詞「候ふ」の、書き方と読み方についての説明の中に見える。

O VERBO substantiuo, *Sŏrai, sŏrŏ, l, soro,* he o verbo substantiuo, *Saburai, saburŏ,* sincopado, & he a mesma letra, & conforme ao seu *Canadzucai* <8>, *Saburai,* se escreue, *Safurai,* & na composiçam da *Cana, Safu,* se le, *Sŏ,* longo ; dõde, de, *Sabu,* ou, *Safu,* sincopandoo pronunciaram, *Sŏ,* dizẽdo, *Sŏrai, sŏrŏ,* por, *Saburai, saburŏ.* (71r)

(結合動詞 Sŏrai, sŏrŏ または soro は、結合動詞 Saburai, saburŏ（候ひ・候ふ）の短縮形で文字 [漢字] もひとしい。Saburai（さぶらひ）を Canadzucai（仮名遣）にしたがって書くと Safurai（さふらひ）となる。Cana（仮名）を組み合せてこのように書いた時の Safu は、長い Sŏ と読む。このことからつぎのことが言える。すなわち Sabu つまり Safu に短縮化現象が生じて Sŏ という発音が生まれ、Saburai, saburŏ を Sŏrai, sŏrŏ と発音するようになった、と。(訳書：(下) 106))

福島 (1972) がすでに指摘しているように、Saburai を当時の一般的な仮名遣にしたがって書くと、Safurafi（さふらひ）となるべきところである。しかしここでロドリゲスが Canadzucai に一致すると見なしている事柄は、Sabu が Safu と書かれるということに見られるブとフの交替と、Safu をソー（開音）と長音によむということの二つのうちの前者の、あるいは両者の現象のことではないだろうか。この二つのうち、ブとフの交替は18v で見られた Goyn の理論のうちア）の清濁の交替であり、同じ18v の Canadzucai の説明にある、音節が他の音節に換わる（②）という現象でもある。また Safu を長音によむことは、やはり②の、音節と音節が合わさる際に短縮化するという項目と合致する。

この<5>, <8>の二つの例から、Canadzucai という概念が、単に仮名という文字の書き方（①）にとどまらず、語を形成するときの音節の合わさり方（②）、言い換えれば、語の中における仮名の特殊な読み方をも含んでいることがいっそう明確になった。

以上のように、小文典に見られる Canadzucai の８例は、Goyn とともに用いられている箇所でも、単独で用いられている箇所でも、18v から19r で述べられている Goyn と Canadzucai の説明に合致する内容となっている。

3．日本の仮名遣書との関係

2．から、ロドリゲスの用いた Canadzucai の意味がほぼ明らかになった。ここでは、日本においてすでに用いられていた「仮名遣」という用語と比較して考察を加えたい。

「仮名遣」という語は、広く仮名の使い方という意味で用いられることがあったが、狭義の、同音の仮名の使い分けという規範的な意味で用いられることが多かった。

オワノ仮名ハ オモフ オシム ワタル ワカルト云ニ用之也　下ニハ大略不用之也　是ハ仮名ツカイナリ（『桂庵和尚家法倭点』[3] 元和頃刊）

能筆の文字かな遣いの相違あるは悪筆にもおとれり（『慶長見聞集』[4] 1614年奥書）

ロドリゲスが Canadzucai という語を使うに至った経緯は明らかではないが、最も確実な根拠となるのは、小文典に書かれている「Canadzucai とその一般則を説明した小冊子」(19r)、いわゆる仮名遣書の存在である。そこで本章では、ロドリゲスの記述と、彼が言及している当時のいわゆる仮名遣書との共通性・相違性を見ていく。

3.1. 規範的仮名遣（狭義の仮名遣）の扱い

「定家仮名遣」として普及した『仮名文字遣』(1363年以降成立) に含まれている仮名遣は、「い」「ゐ」「ひ」、「え」「ゑ」「へ」、「お」「を」「ほ」、「う」「ふ」「む」、「わ」「は」の使い分けであり、ア行・ワ行・ハ行（転呼音）の使い分けを中心としている。後世の仮名遣書はこの使い分けを基調としながら、字音仮名遣や四つ仮名など他の使い分けについても言及するようになった。

しかし、小文典においては、仮名についての具体的な説明を見るところ、日本の仮名遣書で重視されていた上のような仮名の使い分けについての記述はほとんど見られない。ただし、ハ行転呼音に関しては、二つ以上の仮名で表す音節を説明した中に二文字目以降の「ふ」の読みを示した、大文典には見られない記述がある。

Com as syllabas. { *Fiyo.* (sic), *Kio.* (sic), *Rio.*, *Kefu.*, *Nafu.*, *Kifu.* } Escreuẽ, & pronũciã. { *Fio.*, *Kio.*, *Rio.*, *Keô.*, *Nŏ.*, *Kiŭ.* } As primeiras quatro se pronunciam ao modo das liquidas, tocando mui pouco no, *I*, ou *E*. Vt, *Fionna, Tanrio, Fikeô.*

As que se compoem de tres syllabas sam comumente as que tẽ as vltimas longas, & tambem as syllabas que liquescuut. Vt,

Cõ as syllabas. { *Cuuau*, *Kiyau.*, *Kiyufu*, *Niyau.*, *Niyufu* } Escreuem, & pronunciam. { *Quŏ.*, *Kiŏ.* (sic), *Kiû.* (sic), *Nhô.*, *Nhŭ.* } A letra, *V*, post *Q*, sempre liquescit.

(8v)

(二つの音節 [字]、Fiyo (ひよ)、Kiyo (きよ)、Riyo (りよ)、Kefu (けふ)、Nafu (なふ)、Kifu (きふ) はそれぞれ、Fio Kio Rio Keô Nŏ Kiŭ と表記し、Fio, Kio, Rio, Keô, Nŏ, Kiŭ と発音する。最初の四つ [にある I または E の音(おん)] はほとんど I または E でなくなり、半母音のようになる。例、Fionna (ひよんな)、Tanrio (短慮)、Fikeô (卑怯)。

三つの音節 [字] から成る Sumi (清) の音節は最後の音節が長くなるのが通例である。また半母音化する音節を持つものもある。例えば三つの音節 [字]、Cuuau (くわう)、Kiyau (きやう)、Kiyufu (きゆふ)、Niyau (にやう)、Niyufu (にゆふ) はそれぞれ、Quŏ Kiŏ Kiû Nhô Nhŭ と表記し、Quŏ, Kiŏ, Kiû, Nhô, Nhŭ と発音する。Q に続く文字 V はつねに半母音となる。(訳書 : (上) 54-55))

ここでは、Kefu (けふ) と書いて Keô (合音キョー)、Nafu (なふ) で Nŏ (開音ノー)、Kifu (きふ) で Kiŭ (キュー)、Kiyufu (きゆふ) で Kiû (ママ) (キュー)、Niyufu (にゆふ) で Nhŭ (ニュー) と、入声音を含むハ行音の転呼のために、二文字目以降に書く「ふ」を長音に発音する例が挙がっている。このことが発音上の規則として明記されているわけではないが、ロドリゲスがこの法則を理解していたことはほぼ明らかであろう。また、先に挙げた71r の動詞「候ふ」について説明した箇所でも、やはり二文字目の「ふ」を長音に読むことにふれている。(但し、71r では Canadzucai という語を用いて説明しているが、8v ではこの用語は見られない。)

したがって、ロドリゲスは小文典執筆の段階で二文字目以降に書かれた「ふ」が長音に読まれるのを知っていたことはほぼ確実であろうが、ハ行転呼音「は」「ひ」「へ」「ほ」の読みについて知っていたかどうか、記述がないため明らかではなく、そのほかワ行・ア行の使い分けについても言及されていない。

小文典では、ハ行転呼音を除けば、仮名遣に関する具体的な記述は、開合 (8v)、拗音 (8v)、撥音の「む」表記 (9r)、入声音の「つ」表記 (9r)、マ行音の前の V を「む」と書くこと (19r) など、場合によって別の音節に換わる仮名、つまり一文字で二種類以上の読み方がある仮名について示している。その一方、「い」「ゐ」、「え」「ゑ」、「お」「を」という当時すでに同音になっていた仮名の使い分けについては説明がない。

このことは、以下の5v に見える、学習者に書くことよりまず読むことの習得を勧める方針によるものであろう。

> como estiuerem algum tant auante nella, por nenhum modo deuem compor se naõ no estillo da escritura ; ... E pera isto ajuda muito aprender a ler sua letra corrente dos liuros Iaponicos, que estam em lingoa de Iapam, & os liuros das cartas, ainda que nam saibam escreuer, ao menos saibam ler, *Cana* misturada com algũas letras. (5v)
>
> (ある程度進歩したら文章体以外で文を書くようなことは絶対にしてはならない。……このための大きな援けとなるのは、日本語で書かれている書物や書簡集のなかに見られる使用頻度の高い文字の読みかたを覚えることである。したがってたとえ書きかたはわからなくとも、Cana (仮名) と文字 [漢字] の混じたものを読むことだけはできなければならない。(訳書 : (上) 43-44))

ロドリゲスは書くことよりまず読むことを習得させるために、平仮名で書かれたものを読む

のに最低限必要な仮名遣だけを小文典に盛り込もうとしたためであろう。日本語を学ぶ外国人にとって、主に和歌・連歌の世界だけで通用する、しかも規則性を見出しにくい仮名の表記上の決まり事を、初歩の段階で学ぶ必要はなかったのである。

しかしながら、先に見た通り、本来の音で読まないハ行転呼音の「は」「ひ」「へ」「ほ」についての説明はなく、平仮名文を読むための仮名遣を学ぶには小文典だけで十分とはいえない。

3.2. ロドリゲスが仮名遣書から取り入れた活用の原理

前項から、ロドリゲスの仮名遣に関する具体的な記述が、日本の仮名遣書とは重点の置き方を異にしていることが明らかになった。

しかし、前節でもふれたように、仮名遣書類は次第に内容が豊富になり、ただ用例を挙げるだけでなく、発音や意味などの違いにより使い分けの法則化が試みられるようになった。そしてその中に、ロドリゲスの Canadzucai 論と重なる箇所をもつ書がある。つまり、仮名書き分けの原理のひとつとして、活用を取り上げたものがいくつか見られるのである。

『後普光園院御抄』[5]（二条良基著、1382年成立か）はその早い例として注目される。この書では、「いろは」に続いて仮名の使い分けの用例が挙げられるが、その使い分けの原理として活用による説明が見られる。

一 端のへ　薫（にほ）へとのへの字也　故に母字（筆者注 語中語尾に用いる字）に用之　中に有不比江韻字之　いはく　敬 うやまふ うやまひ うやまへ　随 したかふ したかひ したかへ　答 こたふ こたひ こたへ 等多し

「故に母字に用之　中に有不比江韻字之」は、活用形の語尾がフ・ヒ・エとなるとき、エには「へ」を書く、という意味であろう。このほか、「奥のひ」（「ひ」の仮名）、「中のえ」（「え」の仮名）の項でも類似の説明が見られる。

また福島 (1972) は、馬を「むま」、梅を「むめ」と書くことなど、ロドリゲスの記述と重なる部分をもつ仮名遣書として『仮名遣近道』[6]（伝一条兼良 (1402-1481) 著）を挙げている。この書は、使い分けの難しい仮名について多くの用例を列挙しているだけでなく、「音連声相通」と題する五十音図や、相通説についての記述が見られることが注目される。

一　端のへの字の事五音相通にてふひへ〳〵と讀字は皆への字なり

ふひへ　朋友（トモナフ）　語（カタラフ）（中略）

はひふへほの五音ははひに通しへははに通故にふひへの殊にある字はこのことし　此外へふ〳〵と書字の事

かへかふる更　かそへかそふる算　（以下略）

ここではハ行四段とハ行下二段の動詞を例にして、ハ行の仮名遣を活用によって説明している。

一　中のえの事

やいゆえよ相通故にゆえと通かなは皆中のえなり

見えみゆる見　きこえきこゆる聞　（以下略）

これはヤ行の相通することを述べたものである。

一　中のゐの事

訓に當ゐ一方にいひ詰てあまたにかよはぬは皆中のゐなり

くらゐ位　くれなゐ紅　（以下略）

「一方にいひ詰てあまたにかよはぬ」とは活用のない語を指すと思われる。つまり、訓読みで活用のない語に対しては「ゐ」の仮名を用いる、という意味だと思われる。

そのほか同時代の仮名遣書としては、島田 (1966) によると、肖柏 (1443-1527) 著『仮名遣近道之事』、三条西実隆 (1455-1537) の著と伝えられる『仮名遣極意』『仮名遣捷径集』『仮名遣九折』にも、ハ行などを例に挙げた相通説が見られるという。

小文典の18v では Canadzucai の内容として、①平仮名で書く方法、②語を形成するために音節・文字を組み合わせる方法、③平仮名で各法の時制を書き表す方法、の三つが挙げられていたが、そもそもこの箇所が動詞の時制と法を示す活用語形の導きかた一般について述べる冒頭の部分であり、実際に本文の記述でも③の活用形の導出方法に重点が置かれていた。特に小文典が対象とする日本語学習の初心者にとっては、日本語の活用の原則を知ることが極めて重要であると考えられたのであろう。

ロドリゲスは、（おそらく、教養ある日本人の助けを借りて）仮名遣書を読んだときに、実用的な意味のうすい仮名の表記上の使い分けでなく、仮名遣書にとっては本来付加的なものであったが、日本語の活用を習得するのに役立つ「五音相通」の理論に実用性を認め、強い関心を示したものと思われる。

4．まとめ

小文典においては、大文典では見られなかった Canadzucai という語が度々用いられている。その用例８例の分析から、ロドリゲスの Canadzucai という用語について、以下のようなことが明らかになった。

第一に、Canadzucai を Goyn すなわち五十音図の理論に基づいた実際上の仮名の使い方と見なしていること。

第二に、Canadzucai の指す内容の中に、単に文字（仮名）の書き方という表記上のことだけでなく、Goyn の理論に基づいた語形の変化の捉え方を含めていること。そして、そのような語形変化の解釈と密接な関係のある Goyn と Canadzucai についての知識をもつことは、活用形導出法の習得のためにきわめて重要であると考えていること。

第三に、仮名の使い分けの規範という狭義での仮名遣の意味でなく、むしろ当時いくつかの仮名遣書で見られるようになっていた、仮名を書き分ける原理としての活用の概念を Canadzucai の重要な要素として取り入れたこと。

ロドリゲスが重視した Canadzucai とは、仮名遣書の中心であった表記上の仮名の使い分けではなく、外国人にとって習得の難しい活用形の導出に役立つ、五十音図に関わる知識だったのである。

＜注＞

(1) 小文典の引用は、本文はロンドン大学本影印（笠間書院1989）及びアジュダ図書館本影印（新人物往来社1993）を、邦訳は池上岑夫訳（岩波書店1993）を用いた。
(2) 原文の verbo は、日本語の品詞でいえば動詞だけでなく形容詞（原文 verbo adiectiuo）も含んでいる。
(3) 引用は『大日本史料』九編之一（東京帝国大学1928）所収の翻刻による。
(4) 引用は『江戸史料叢書』（新人物往来社1969）所収の翻刻による。
(5) 引用は『静嘉堂文庫蔵 後普光園院御抄 仮名遣つゝらおり』（武市眞弘編 和泉書院1989）所収の影印による。
(6) 引用は『国語学大系（仮名遣一）』（福井久蔵編 厚生閣1939（覆刻 国書刊行会1975））の翻刻による。

＜参考文献＞

池上岑夫訳（1993）『ロドリゲス日本語小文典』（上）（下）岩波書店
木枝増一（1933）『仮名遣研究史』賛精社
島田勇雄（1966）「連歌師のかなづかい書」『西鶴本の基礎的研究』明治書院（1990）所収（初出『甲南大学文学会論集』32）
土井忠生訳（1955）『ロドリゲス日本大文典』三省堂
土井忠生解題・三橋健書誌解説（1976）『日本文典』勉誠社
豊島正之（1989）「ロドリゲス大文典から小文典へ」『国語国文研究』83 北海道大学
福島邦道（1972）「ロドリゲス日本小文典考」同著『キリシタン資料と国語研究』笠間書院（1973）所収（初出『実践女子大学文学部紀要』14）
福島邦道編（1989）『Ｊ．ロドリゲス日本小文典』笠間書院

＜付記＞

本稿は、国語学会2001年度秋季大会（2001年10月於福井大学）における研究発表をもとに、大幅に加筆・修正したものである。ご教示を頂いた多くの先生方に、心より御礼申し上げる。

＜キーワード＞ロドリゲス、仮名遣、『日本小文典』

(2002.1.30受理)